会員の広場

新一万円札、うらおもて

松下　滋（東京）

日本銀行が銀行券を発行し始めたのは１８８５年（明治18年）だが、当初は日本銀行券とは言わず、正貨（当初は銀貨、明治30年以降は金貨）と兌換することを約束した兌換銀行券だった。しかし、１９３１年（昭和６年）金輸出再禁止とともに兌換は完全に停止され、第二次世界大戦中の１９４２年（昭和17年）に制定された旧日銀法の下で日本銀行券になり、今日に至っている。

１９４３年以降の日本銀行券の肖像を振り返って見ると、敗戦前は、和気清麻呂、菅原道真、武内宿禰、聖徳太子、楠木正成。敗戦後は、聖徳太子、和気清麻呂、二宮尊徳、岩倉具視、高橋是清、板垣退助、伊藤博文と、政治家が優位を占めていた。その後、福沢諭吉、新渡戸稲造、夏目漱石、野口英世と文化人・学者が登場、さらには樋口一葉と、女性も採用されるようになった。２年後の２０２４年からは、一万円札渋沢栄一、五千円札津田梅子、千円札北里柴三郎の布陣になることが予定されている。

新一万円札。おもて面の渋沢栄一は、明治日本の経済を耕した先駆者であり、福祉や教育など公益の追究者であり、米・仏・中国など民間外交の草分けであった。その生涯は、幸田露伴筆「渋澤栄一傳」（１９３９年、岩波書店刊、定価１円50銭）の冒頭の一節に凝縮されている。「時代の要求するところのものを自己の要求とし、時代の作為せんとする事を自己の作為とし、時代の意気と希望とを自己の意気と希望として、長い歳月を克く勤め克く労した」。幕末（天保11年）から明治、大正、昭和（６年）まで、いろいろな職業に関わりながら91年を生き抜いた渋沢は、人生百年を複線型ワークで生きようとする今日的課題を、とうの昔に実践していた。

うら面は、東京駅丸の内駅舎。辰野金吾博士の設計で駅舎が建設された仮称「中央停車場」を、１９１４年（大正３年）の開業にあたって、「東京駅」と正式な駅名を発案したのは、中川正左（鉄道院総裁官房文書・法規主任）だった。東京駅を起点に全国に張り巡らされた鉄路は、持続可能な経済活動の強靭な基盤として、その後日本社会の発展に大きく貢献した。敏腕をふるった中川正左は鉄道次官まで昇進。退官後は地下鉄や私鉄の発展にも尽力。東海道新幹線の開通を心待ちにし、試乗に間に合って間もなく、１９６４年初頭他界した。

実は、渋沢と中川は、深い関係にある。中川正左の長男が渋沢栄一の曾孫と結婚、正左の三女は栄一の孫に嫁している。新一万円札のうらおもては、二重の縁で結ばれている。